

シャロレ伯爵 (3)

リヒャルト・ベア = ホフマン著
松川 弘*・訳

(平成28年10月31日受付)

Der Graf von Charolais (3)

von
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 31, 2016)

飾り布の仕立屋：

はい、伯爵様！

でも、私たちは（イーツイヒを指差しながら）この男に、
三人を代表して話すことを委任したんです。

ロモント：

このユダヤ人にかい？

シャロレ：

（目でロモントをなだめる）

ロモント！

うん、聞くから、言ってごらん。

イーツイヒ：

（そっけなく、非常に早口で、棒暗記したことを暗唱する
ように）

伯爵様は、今日の九時に大きな会議が開かれることをご存
知でしょう。

そこで、昨日の裁判所の決定が承認されることになりま
す……。

ロモント：

それはまだ分らんぞ！

（シャロレは、軽い手振りでロモントをなだめる）

イーツイヒ：

わしは、承認されると思います。

それは、彼らが、わしらのためにそう裁決したのではない
からです。

法律がそうなっているから、彼らはそのように裁決せざる
をえなかったのです。

今日まで、その法律は変更されていません。

恐らく、もっと早く調停にもちこむことは可能だったで
しょう。

わしらも、伯爵様も、事件がこれほどまで世間を騒がせる
のを防ぐことができたかも知れません。

お尋ねしますが、何か古い銀器をお持ちではないでしょ
うか？

金の首飾りや真珠、宝石類などは？

シャロレ：

（おだやかに）

宝石は持っていない！

イーツイヒ：

城や館は？

森や農園などはどうなんですか？

シャロレ：

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

(苦笑して)
農園もないんだよ！

イーツイヒ：
遺産相続の望みはおありなんでしょう？

シャロレ：
(小声で)
望みもないんだ！

イーツイヒ：
あなたのために何かしてくれる親類はおありなんでしょう？

シャロレ：
(溜息をついて)
私は、家系の最後の一人なんだ！

イーツイヒ：
ちえっ！
こりゃどうしようもない！
もう行こう！
(他の二人の債権者とともに戸口に向かおうとする)

飾り布の仕立屋：
(小声でイーツイヒに)
あんた、自分の言ったことを忘れてやしないか？

イーツイヒ：
(彼をなだめて)
彼は、またおれたちを呼び戻すよ！

シャロレ：
待ってくれ……。

イーツイヒ：
(小声で)
えっ？
何かおっしゃいましたか？
伯爵様！

シャロレ：
債権証書を新たに——私の名前で——交付しよう。
私は辞職して、オランダへ行くつもりだ。
(イーツイヒは断わる仕草をする)
東インド会社で……。

イーツイヒ：

東インドは遠いですよ！

債権証書にあなたの名前を書かれても、それは、その名前が確かな保証人によって保証されているときにのみ有効なんです。

粉屋：
その通りだ！

シャロレ：
(苦しげに)
どこにそんな保証人がいるんだ？！

イーツイヒ：
(小声で、なれなれしく)
伯爵様！
その人はもう見つけてあります！
(大声で)

誰かが呼び鈴を鳴らしているんじゃないのか？
(小声で主人に)
親父さんを連れて出て行ってくれ。
(主人は父親の腕を取って出て行く)
もし彼が聞いたら、すぐに喋ってしまうからな。
(他の二人の債権者に)

お前さんたちはそこにいるんだ！
(戸口を指差す)
(シャロレに近づいて、なれなれしく、声を低め、しかし決然と、冷たく話しかける)
宿屋の主人がここでみんなと一緒にいる必要がありますかい？

あなたに残されている方法はただひとつです、伯爵様。
金持ちと結婚することですよ！
わしにはその当てがあります。

この太った男には娘が一人いて、ここの修道院に入ってます。

やつにそれを言い出す勇気がないんで、わしがやつの代わりにあなたに頼むんですが。

あなたが今日、やつの娘と婚約を取り結んだら、やつは借金を全部肩代わりしてくれるでしょう。

それに、持参金も手に入りますぜ。
やつには他に子供もいないしね。

一人娘なんですよ。

そりゃ、貴族の出じゃないし、やつの評判もよくありません。

でも、それがどうしたって言うんです？

あなたが結婚するのは親父じゃなく、娘なんですよ！

二時間もすれば、すべてが片付きます。
あなたは裕福な妻を手に入れ、悩みの種はなくなるんです。
会議も開かれなくなるし、あなたは堂々と父上の葬儀に参
列することができるんですよ。

お返事を頂けませんか？

シャロレ：

(非常におだやかに、声をひそめて)

そんなことをしたら、父の葬儀に泥を塗ることになる！

それは駄目だ！

(彼は背を向けて、窓辺に歩み寄る)

ロモント：

(苦勞して自制しながら)

「駄目だ」って、君は言ったんだね？

これで話は終了だ！

(イーツイヒを厳しくにらみつけ、彼と間近に相對して)

こんな途方もないことをよく思い付けるもんだ。

イーツイヒ：

(視線をはね返し、腹を立て、蔑むように)

ちえっ！

もう手遅れなんだよ！

ロモント：

(他の二人の債権者につつかかる)

こいつにはもう何も期待できない！

お前さんたちはどうなんだ？

(飾り布の仕立屋と粉屋は、不安そうに戸口に引き下がる)

飾り布の仕立屋：

(粉屋とともに戸口に退いて)

わたしたちは、交渉の全権を一旦彼に委任したんですよ。

もうもとへは戻れません。

ロモント：

(彼らを戸口に押やる)

出て行け！

みんな、出て行くんだ！

(彼らを追い出して、ドアをバタンと閉める)

ロモント：

(イーツイヒに向かって)

お前はまだそこにいるのか？

(身を震わせ、小声で)

出て行け！

イーツイヒ：

(ロモントとにらみ合う。叫びはしないが、反抗的に、きつ
ぱりした口調で)

ここは宿屋なんですよ。

主人ならともかく、あんたはわしと同じ客なんだ。

わしが注文したのも、まだそこにあるしね！

(玉子に手を伸ばし、それを割って、興奮のあまり震える
手でむきはじめる)

ロモント：

(拳を握って、イーツイヒをにらみつける。彼に打ってか
からないよう自制するのに苦勞している)

自分が金持ちのユダヤ人だから、何でも勝手なことができ
るって思っているのか？

ちえっ！

お前の金なんか糞くらえだ！

イーツイヒ：

(うなずき、苦笑しながら)

自分が払う金は汚くないってわけか？

(初めて、身振り手まねをまじえて)

わしから取った金だと汚ってわけか？

ロモント：

(彼と肩を接して)

早く平らげて、出て行けと言ってるんだ！

それから、憶えておくんのだ！

おれたちは、自分の名誉や名前を売ったりはしない。

そのお蔭で、お前は金持ちになったんろうがな。

おれたちはユダじゃない！

イーツイヒ：

わしが自分の金を欲しがったのが、そんなにお気に召しま
せんかね？

わしの金をあんたたち全然返してくれないじゃないか！

それはわしの金で、あんたたちじゃない！

あんたたちの金にゃ、時折、汗がくっついてるかも知れな
いが、わしらの金は、自分たち自身の血、憤怒、恥辱、あ
ざけり、悲惨からしたたり落ちたものなのさ。

ロモント：

おれの前で、何御託を並べているんだ！

黙れ！

イーツイヒ：

(分別を失って、叫ぶ)

これが黙ってられるか！
わしがあんたに貸した金を一銭でもいいから返してくれと
幾度頼んだか、あんたはご存知だろう！

ロモント：
(握りこぶしで彼の腕を打つ)
手を引っ込めろ！

イーツイヒ：
痛い！
(彼はよろめき、その腕は萎えたように垂れ下がる。崩れるように椅子に腰をおろす)

シャロレ：
(窓辺の階段を急いで駆け下り、不機嫌に)

ロモント！
(小声で)
彼の言うことはもともとだ！
僕に金があれば、何も言わずにそれを彼に払うだろう！
彼が僕たちのために損をしたからといって、僕が彼をけな
していいわけがあるのか？

ロモント：
(強い口調で、腹を立てて)
なんたることだ！

シャロレ：
席を外してくれ！
僕と彼だけにしてくれないか？

ロモント：
(疑い深く)
君は何をするつもりなんだ？

シャロレ：
(元気なく、短く)
彼に頼むんだよ。

ロモント：
(ぎょっとして)
君は恥ずかしくないのか？

シャロレ：
(声をひそめて、しかし決然と)
いや！

父親の遺体のことで彼に頼むのが恥ずかしいことだとは思

わない！
(ロモントは、返答しようとするかのように彼をみつめ、
不機嫌そうに頭をうしろに反らせて立ち去る)

シャロレ：
(あえぎながら痛む腕を押えているイーツイヒに向かって、
声をひそめて)

僕たちは、君の決定に従うよ。
すべては君次第だ。
君は確かにユダヤ人だが、僕たちと同じ人間だろう。

イーツイヒ：
(疑い深く見上げ、不審そうに小声で)
人間？

あんたたちと同じ？
いつからわしが人間なんだ？
これまで、わしを人間扱いしてくれた人はいない。
今日、今からわしは人間だとしても言うんですかい？
その方が、あんたたちにとって都合がいいから？
五分間でも、その方が都合がいいから？
いいや、今日、わしは人間でいたくない！
(よそよそしく、強い口調で、しかし声を荒げずに)
だめだ！
わしはユダヤ人なんだ！
あんたたちは、ユダヤ人から何が欲しいんだ？
あんたたちは何かが欲しいから、わしに近づくんדרろう？

シャロレ：
父の遺体を引き渡してくれ！
そのために僕の命を賭けてもいい！
頼む！
こうやって頼むことがどんなにつらいか、察してくれ！

イーツイヒ：
お願いするのはこっちの方ですぜ！
伯爵様！
わしの金を返してください！
こっちの生活がかかっているですよ！
あんたは簡単に「命」とおっしゃるが、その言い方は、わ
しらを侮辱したことになるんですよ。
もしわしに金がなけりゃ、一体誰がお偉方からわしを守っ
てくれるんです？
あんたたちは簡単にわしを打ち殺すことができる。
でも、お分かりのように、わしの場合、自分の命は、実際
のところ、金次第なんです！
わしの「命」はね！

シャロレ：

(彼の人間性に訴えるように、早口で、淀みなく)

嘲るのはもうやめにしてくれ！

この国のために、高潔な彼は借金を背負って、平和をもたらしたのだ。

この町で未だかつてなかったほどの葬儀が、彼のために準備されねばならない！

債務者監獄の牢のなかで彼の遺体が腐敗していることを、僕は知っているし、それに耐えねばならないのだ！

いや、そうじゃない！

僕と父のことは今考えなくていい！

(嘆願するような目付きで)

君は、自分がここにいること、君の父のことを考えればいいのだ！

君のこと、君の父のことを考えてくれ！

イーツイヒ：

(声をひそめて、シャロレの方を見ずに、むしろ独り言のように、ゆっくり語りはじめ、次第に早口になっていく)

わしはずっと前から彼のことを考えてました！

もちろん、彼の遺体は牢のなかで腐りはしませんでした

ね！
彼が生まれた町では、彼の葬儀に出費を厭いませんでした！

夜明け前にすでに、兵士たち、会衆、教団員、すべての聖職者が出ていました！

ひとりのユダヤ人に何という榮譽が与えられたことでしょう！

王様ですら、大宮殿に蟄居し、すべてがユダヤ人に捧げられました！

彼らはすべての鐘を打ち鳴らし、旗を掲げて、わしの父の前を通り過ぎました。

スペイン語やラテン語の演説も行なわれ、七月の暑さのなか、彼らは一日中、広場で我慢していました。

すべてがわしの父のためなのです。

それから、晩、辺りが暗くなると、王様が

(我慢するふりをして)

ご自身の手で、薪の山に点火されたのです。

(今まで確信がもてず、この話が何を意味しているのか考えていたシャロレは、それを理解して、思わず一步後ろに下がり、そっぽを向く)

その薪の山の上にわしの父がいたんです。

(徐々にテンポを速めながら)

これだけではまだ不十分と思ったのでしょうか、彼らは歌を歌い始め——彼がユダヤ人だったので——彼に敬意を表して、わたしたちの古い聖歌を歌って聞かせました。

そして、彼に敬意を表して、わたしたちの神を誉め讃えたのです！！

(ひきつった微笑を浮かべて)

彼がそれに気付いたかどうか、わしには分かりません。それは、彼がすでに下の方から燃え始め、叫び始めたからです。

彼は、それは大きな声で叫んでいました。

わしは、彼が「シェマ イスラエル！」と大声で叫ぶのを聞いたのです！

(両手で悲鳴を押し殺し、彼は、あえぎながら気を静めようとする。それから疲れ果て、元気なく)

さあ、伯爵様、まだお望みですか？

わしは、自分の父のことを考えていたんです。

あなたの亡き父上が今腐りつつあるのは、まことにお気の毒ですが？！

シャロレ：

(絶望して叫ぶ)

それをしたのは僕じゃない！

どうしてお前は自分の憎しみのすべてを、今この僕に向けてるんだ？

僕に一体何ができると言うんだ？

僕が一体お前に何をしたと言うんだ？

イーツイヒ：

(新たに憎しみと嘲りをつのらせて)

まだ何もなさってません！

今までその機会が無かったんです。

わたしたちは、今日初めて会ったんですから。

(自分の腕を指差しながら)

もうわしは利益を上げました。

最初にしては十分すぎるほどの利益をね！

シャロレ：

(絶望して)

お前は一体僕にどんな償いをさせようとしているんだ？

この僕に！

これでもう十分じゃないのか？

僕の父がこの僕にとって何だったか、お前は知っているはずだ。

お前は何も分かっちゃいない！

(彼は崩れるように腰をおろし、頭を抱え込む)

イーツイヒ：

(非常に落ち着いて、苦笑しながら)

わしには分からないっておっしゃるんですか？

それを理解することはそんなに難しいことですかねえ？

ご冗談でしょう？

わしを馬鹿扱いなさるんですか？

分かっている証拠を、あなたにお見せしようじゃないですか！
(机越しに、シャロレの方に体を傾けて、なれなれしくほとんどの同情するように、声をひそめて話しかける)

あなたは、父上以外に誰も身寄りがないってことをおっしゃりたいんでしょう？

それに、女やそれに類したことが、あなたの念頭にあるようにも見えません！

まだ 貧しくて、喜びの経験もないが、それが理解できるくらいの年齢には達しているのだから、「父」という言葉の意味が、あなたには人の十倍も強く鼻につくんでしょ！

わしは、一昨日までまだ生きていた、あなた以外は誰も知らない人のことを言ってるんですよ！

あの人に、あなたは、自分の望むことをしてあげられたはずだ！

あなたが泥棒や強盗、人殺しになったとしても、あの人にはあなたを愛することを決してやめなかったはずだ！

あなたが幸せになるんだったら、喜んで乞食もしたろう！

死んだとき、あなたに自分の眼を閉じてもらうという法外な望みをあの人には抱いていた。

あなたの眼を閉じてやることは、望んでいなかった。

そして、あの方は毎晩祈っていた。

「神よ、息子に災いをもたらすくらいなら、私に一万回の死をお与えください！」とね。

お分かりですか。

あなたは、一昨日には、まだそんなにも恵まれていたんですよ！

それに今日はどうですか？

たとえ百まで生きていたとしても、あなたはそんな幸せをもうどこにも見つけられはしないだろうね！

その機会は、もう永久に失われたんだ！

望みはないんだ！

友達？

ありがたいもんだ！

それに、女……

(探るように)

一人だけか！

子供は？

(苦笑する)

子供はいない！

わしらには両親が健在だが、あなたの場合は、誰もいない！

そうでしょう？

わしはよく分かっているでしょう、伯爵様？

シャロレ：

(立ち上がり、思わずイーツイヒの方に近寄る。声をひそめて、心から願うように)

もしそう感じているのなら、僕の困窮を思い遣ってくれたまえ……。

イーツイヒ：

(再び厳しく、無慈悲に)

わしが？

あんたのことを思い遣るだって？

あんたに対する思い遣りは、確かにとても大事だし、すばらしく純粋で、ぴかぴかしたものでしょよ。

わしが貸した金と同じようにね。

あんたはそれを、金と同じように受け取ればいいんです。でもね、あんたはわしにそれを返さなくっちゃいけませんよ。

そのとき、あんたは、以前わしの金に言ったのと同じ言葉を浴びせるんでしょうな。

「このユダヤ人め！ お前なんか糞くらえだ！」ってね。

シャロレ：

(落ち着きを失い、強く、大声で)

君は、僕の言おうとすることを、いちいち先回りしてひねくり回し、僕を苦しめる道具になるまで、それに磨きをかけているんだ！

(怒りを爆発させて、叫ぶ)

僕をそんな邪悪な目付きで見ろな！

出ていけ！

僕はお前が恐ろしい！

この悪人め！

イーツイヒ：

(シャロレの怒りの爆発に、思わずドアの方へあとじさりし、出ていこうとする。しかし、「悪人」という言葉を聞いた瞬間、立ち止まり、その言葉に極めて深く心を動かされた様子で)

「悪人め！」だって。

どうしてわしがあんたたちと同じように善人でなきゃならないんだね？

それにゃ、たったひとつの理由しかない！

そうでしょう、伯爵様。

人間はそもそも、すべからく他人に対して善良でなくちゃならない、そうあんたたちは思っているんでしょう？

——みんなが吹っかける無理難題に縮み上がっているわしの心臓を取り出してください。

わしの眼をえぐり出して、どんな誘惑にも曇らされない別

の眼をください。

他人に屈せねばならないので曲がってしまったわしの背中を切り取ってください。

そして、生きているあいだは疲れることもなく、いつも歩き回っている別の足をわしにください。

忘れることができるように、わしの頭を打ち割って、脳をちぎり取ってください。

最後に、わしの血管を切開して、そこからわしの血が流れ出るようにしてください。

そうすれば、わしの親父やそのまた親父の苦しみや悲しみはすべてわしの体から消えてなくなるでしょう——あんたたちがわしにそれらをすべてしてくれたら、わしは、善良な人間になって、あんたたちと話し合えるでしょう。——そのときがくるまで、わしが、あんたたちにとって、卑劣なユダヤ人であることに変わりはないんだ！

(彼は行ってしまふ。ロモントが開いたままのドアから入ってくる)

シャロレ：

(彼の方に駆け寄る。まだ興奮のあまりあえいでいる。あわただしく)

彼はもう立ち去ったのか？！

彼は、僕の心の痛みを徹底的に掻き立て、それで、彼に何もしなかったこの僕を苦しめたんだ。

彼の視線に憎しみがこもっていたかい？

彼が話しているとき、この僕には、彼の顔付き、身なりのすべてが、憎しみで膨れ上がった無数の眼として、僕だけにつかみかかってくるように思われたんだ！

(部屋のなかから、仮面をつけた男女がこっそり出てくる。それに続いて、廊下の方から、仮面の老人が二人の娼婦を連れてやってくる。みんな、出来るだけひそかに、開いたままの玄関口から逃れ去ろうとする)

シャロレ：

(振り向き、びっくりしてサーベルを引き寄せる)

今ここにいた彼らは、一体誰なんだ？

なぜ仮面をつけているんだ？

何をするつもりなんだろう？

ロモント：

君は気でも狂ったのかい？

サーベルを鞘に納めろよ！

シャロレ：

彼らはどこから来たんだ？

どうして仮面をつけているんだ？

ロモント：

(立腹して)

人に見られても分からないように仮面を付けているのさ。

この宿屋の部屋で、彼らは泊まったんだよ。

今ここで君が出会ったのは、相愛の男女さ！

シャロレ：

君は僕を今日ここに連れてきたんだったね。

ロモント：

ここが僕たちの見つけた最初の宿屋だった。

宿屋を選んでいる場合じゃないと思ったんだ。

ここの主人は信用貸ししてくれるし、噂で僕たちを傷つけることがないのは有難いことだよ。

女中：

(料理とワインの壺、グラスをのせた盆を運んでくる)

内儀さんが伯爵様にとのことです！

(それらをテーブルの上に置く)

冷めますからお早くどうぞ！

(ロモントに)

この方の御父様は亡くなられたんですか？

でもね、私をごらんなさい。私は父親の顔も知らないんですよ。

ともかく、何か召しあがらなくっちゃいけませんよ！

あなたは、ご自分も葬り去るお積もりなんですか？

(彼の方に身をかがめて)

あなたはまだお若いし、幸せな時がたっぷり残されているんですよ。

昼も夜もね。

それに、こんな素敵な方を、誰が孤独にしておくもんですか。

あなたに対する愛から、あなたを喜んで慰める人は、きっとたくさんいますよ！

シャロレ：

放っておいてくれないか！

吐き気がするんだ！

女中：

私がいるからですか？

もう退散しますよ！

ロモント：

(ワインをグラスに注ぐ)

まあ、飲み食いすれば。

(グラスをシャロレに差し出す。シャロレはグラスを口に当てるが、飲むまえにグラスを下ろし、しゃくり上げる)

ぐっと飲めよ！

気をしっかり持つんだ！

シャロレ：

僕はもうだめだ！

ここにいるのが、父を偲んで泣く哀れな息子とってくれるな。

僕は自分のことだけを思って泣いているんだ。

僕は、何時だって自分のことだけしか考えていなかった！道端の家の明るい窓を見たとき、僕は、何がその住人をこんなに遅くまで眠らせないのか考えたものだ。

それは、くつろいだ会話に過ぎないのかも知れない。

また、心配事や悲しみから寝つかれないのかも知れない。でも、何かが彼らの心を結び付けていることは確かで、その意味では、彼らは孤独じゃない！

僕らの乗馬が頭をもたげ、まだ牧場に置いてある刈り立ての干し草の匂いを鼻の穴を開いて吸い込んだとき、草を刈り取った男が晩に空を仰ぎ見て、「出来ることならこのまま天気がもちますように」と言いながら野原を越えて家路につき、収穫を喜び、それを台無しにする荒天やあられを氣遣うさまを、僕は思い浮かべた。

彼に妻子がないとすれば、日々新たに氣遣うことのできるはその財産だけで、彼は毎日、期待と希望を抱きながら、自分と自分の土地を、太陽や月、星座の運行と結び付けて考えるのだろう。

そして、僕たちの乗馬のひづめの音で目を覚ました犬が壁の裏で激しく吠えたとき、この犬には主人がいるんだ、と僕は思った。

この犬は、主人に忠実で、鼻で主人の痕跡をかぎ出して何マイルも走り、主人のそばにいること以外の何も望まない。主人に二度と会えないとなったら、この犬は心痛でやつれてしまうに違いない！

ロモント！

僕は、何を持っているんだろう？

誰が僕のことを愛してくれているのか？

僕は誰のことを氣遣えばいいんだ？

自分の人生を何に結び付けたら、それが無意味に、空虚に過ぎ去るのを防げるのか？

人間を、物を、動物をこの僕に授けてくれ！

僕には、すべてが欠けている。

この欠乏に耐えることは、僕には不可能だ！

僕が立ち去るとき、あとから吠える犬でもいれば、僕は自分にこう言うことができるだろう。

「この犬だけは、お前を好いてくれているんだ！」とね。

僕は、その視線が意味するものを完全に理解できる！僕たちの友情を僕が台無しにしたなんて思わないでくれ！

僕たちは仲のいい友達なんだ！

でも、今はそれだけじゃ足りない！

僕たちが年を取って、満たされた生活や思い出、行動、子供たちなど、すべてが遠方に退き、木から熟した果実が落ちるように僕たちから離れるとき、僕たちは多くのもの、恐らくすべてのものの価値を知るだろう！

今はだめだ！

まだ僕は若すぎる！

僕はまだ憧れを抱いている！

一度でもいいから、無数の他の人々と同じように幸せな暮しがしてみたいんだ！

一度でいい！

朝早く目覚めると、僕の頭上には、もう天幕の灰色の天井はない。

庭に面した窓が大きく開かれていて、涼しい朝の風が、僕に、入り乱れた匂いや音を送ってくる。

しかし、僕はそれらをうまく選り分けることができる。この匂いは、格子戸のところにあるボダイジュで、それにより強く、甘く、ほとんど悩ましげに絡んでいるのは、昨日はまだ閉じており夜のあいだに開花した白百合の匂いだ。その周囲には、蜜蜂の羽音がふだんよりも大きく聞こえている。

あの澄んだ音は、泉水の流れる音だ。

風で曲がった古いオリーブの分かれた枯れ枝がうめき声をあげ、子供たちに踏まれて、砂利がきしんでいる。

僕のこめかみを、今、涼しい風が撫でている。

ここからは見えないドアが開いているためだろう。

風は、今入ってきて、僕の息をうかがっている。

僕はじっと横になっているが、まもなく風は僕の方に身がかがめる。

僕の中に安らぎを求め、僕に安らぎを与えるまなざしが注がれる。

でも、僕は知っている。

僕はここに留まってもいいんだ！

ここは僕の家なんだから！——

僕はこんな経験を決して持つことはないだろう！

決して！

ロモント：

(怒鳴ることで感動を押し隠して)

もういい加減にしてくれよ！

これからも、もっと苦しみに追い回され、法廷で演説するかわりに泣くつもりなのか！

この苦しみから身を守るためには、五官を集中させなければ

ばいけない。

完全に平静でなければいけないんだ！

それなのに、君は、あのならず者のことで気をもんでいる。

そんなことをして何の役に立つんだ？

昨日の晩、君は完全に平静だった。

僕の言うことを聞いてくれていた。

——だが、君は債務者監獄に行かなければならない。

そこで棺が開けられるだろう。

そのことで君の心は、またしてもかき乱されるに違いない。

それに、今の君はこういう状態だろう。

あれは全く余計だった！

全く！

シャロレ：

僕は行かねばならない！

ロモント：

何だって！

そりゃ無理だよ！

シャロレ：

(立ち上がって)

いや！

他人のことはいざ知らず、この僕は行かねばならないんだ！

ロモント：

僕は御免蒙りたいし、君だってそんなことはしない方がいい！

シャロレ：

そんなことを言うなよ！

僕は行かねばならない！

君は、僕にそれを思い止まらせようとするので、この僕から足場を奪い去ろうとしているんだよ。

ロモント、僕は今、他人ならしなくていいことをせざるを得ない状況にあるんだ！

他人なら選択できるが、僕にはそれが出来ない。

他人には多くの道が見えるが、この僕にはただ一つの道しか見えず、その道を行かなくてはならない！

他人は、学校の子供たちのように、毒草と食べられる草を見分ける特徴を考え、探すことが出来るし、何に手を伸ばすか、自由に決めることが出来る！

獣が、生来の本能から、毒のあるものを避けることが出来るように、僕だって、——感覚的に理解しがたいし、理性でも説明がつかないのだが——心の奥底で、これはやめろ、

これを始めると命令するものを信じてもいいだろう！

この信頼を僕から奪い取るのはやめてくれ！

僕はとても貧しくて、何一つ欠けても困るんだ！

僕は、幸運も、天分も、喜びも持ち合わせていない。

この上、僕に疑念を抱かせるのはやめてくれ！

ただ一つ残されているもの、確固たる足取りを、この僕から奪わないでくれ！

ロモント：

(歩み寄り、彼をなだめる)

分かったよ！

君の好きにするがいい！

昨日の裁決が法廷で承認されたら、君が——今みたいに——また馬鹿なことをしてかすんじゃないかということだけを、僕は心配しているんだ！

君の場合、あらゆることを覚悟せねばならないからね！

(両手を彼の肩の上に置いて)

あの悪党どもが正しいと認められたら、君は一体何をするつもりなんだ？

答えてくれないか？

シャロレ！

シャロレ：

今は僕にも分からない。

その時になったら分かるだろう。

その時することを、僕はしなければならぬんだ！

幕

第二幕

裁判長の屋敷の部屋。

背景の真ん中には、高く暗い石造りの暖炉がある。その開口部は、人の背丈より高い。広い炉棚の上には、彫刻と額縁にはいった黒ずんだ肖像画が置いてある。暖炉の前には、重そうなひじ掛け椅子が二つある。暖炉の右手には入口のドア、左手には大きなガラス戸があって、その戸は、テラスと、左手で庭に通じている。右の側壁には、隠し戸が二つある。前の戸は書齋に、後ろの戸は居間に通じている。その二つの戸のあいだには、あまり高くない書架が置いてある。

左の側壁には、庭に面した大きな窓がある。左手の前方に、(タペストリーの掛かった)小さなテーブルがあって、その上には贈り物が置いてある。その中には、毛皮のオーバー、ドレス、リュートが含まれている。右前方に書き物机がある。タペストリーがその机を床まで覆っている。書

き物机の上には文房具と本がのっている。書き物机の後ろと左にそれぞれ、大きなひじ掛け椅子がある。壁には、古いビロードの壁布が張られている。暖炉の前、張り出し、テーブルの前には重いじゅうたんが敷いてある。部屋は、朝の日の光に満たされている。

(庭から——フルート、オーボエ、ヴァイオリン、ヴィオラ・ダモーレによる——四重奏の一節がかすかに聞こえてくる。裁判長は彼の部屋から歩み出る。彼は、華美な衣服の上に、ゆったりした絹の部屋着をはおろうとしている。指輪の一杯はまった白い手で、彼は、宝石のついた留め金を、胸のところで衣服のベルトに留めようとする。そのあいだ、彼は、ふさふさした白髪のを少しかしげて、音楽に耳を傾ける。彼は部屋を通り抜け、贈り物が置いてあるテーブルのところで束の間立ち止まり、それから窓辺に歩み寄って、窓を開けて——楽音はより大きくなる——身を乗り出し、合図する)

裁判長：

フィリップ！

ちょうど、わたしはそのことを考えてたんだ！

そうか、こりゃわしへのものじゃないな。

すぐ娘を呼ぶからな！

(デジレーが彼女の部屋のドアを開ける。彼女は身を屈め、引っ込む)

誰もいないよ、わしだけだ！

(デジレーとバルバラの頭が、半開きのドアから見える)

フィリップは庭で楽士たちと一緒にいる。

まずいかね。

デジレー：

でも、お父様、それは？

バルバラ：

お嬢様はまず……。

裁判長：

何もしなくていい。

待ってなさい！

(贈り物の置いてあるテーブルから、丈の長いビロードのコートを取って、それをドアの方に差し出す)

えっ？

何をするつもりなんだ？

このコートじゃ足の爪先まで覆えないのか？

どうなんだ？

デジレー：

私のものなんですか？

裁判長：

他の誰のものなんだ？

(デジレーは、コートにくるまって部屋に入ってくる。彼女は素足に上履きを履いており、髪は束ねずに垂らしている。後ろにバルバラがいる)

バルバラ：

お嬢様、御覧なさいまし。

(贈り物が置かれたテーブルに駆け寄る)

これは本物のジェノヴァの絹ですよ。

この毛皮……。

デジレー：

そんなのを私、欲しかったの！

バルバラ：

それにこのドレスったら！

まあ、この下着も？

絹の靴下だわ！

(裁判長に)

誰が買い調べて下さったんです？

御覧なさいまし、お嬢様！